

Title	『五代簡要』の標記について
Sub Title	Hyoki (heading of phrase) in "Godaikanyo"
Author	新田, 奈穂子(Nitta, Naoko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2001
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.80, (2001. 6) ,p.1- 23
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00800001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『五代簡要』の標記について

新田 奈穂子

一、問題提起

藤原定家の『五代簡要』は万葉集・古今集・後撰集・拾遺集・後拾遺集の五代の歌集から、三千余りの歌句または一首全体を抄出し、万葉集から古今集の巻十六までは、抄出句の頭に内容を朱書で標記した歌学書である。

本書の伝本は、定家の自筆の書き入れを持つ冷泉家時雨亭文庫蔵本、為家本の転写本とされる志香須賀文庫蔵本『万物部類和歌抄』、彰考館文庫蔵本の三本が確認されている。この三本の関係について、上條彰次氏⁽¹⁾は彰考館文庫蔵本および志香須賀文庫蔵本を時雨亭文庫蔵本生成増益過程における過渡期本と位置付けられ、承元三(一二〇九)年に成立した元本に近い順に、彰考館文庫蔵本、志香須賀文庫蔵本、時雨亭文庫蔵本と推定されている。為家本の成立時期については久曾神昇氏⁽²⁾が奥書に「左武衛藤原朝臣」とあるのを「右」の誤りとされ、為家が右兵衛督であった寛喜三(一二三二)年から貞永元(一二三三)年頃と推定され、上條氏も従っておられる。これに先の成立過程の推定を組み合わせ

ると、志香須賀文庫蔵本は本書の寛喜三（一一三二）年から貞永元（一一三二）年頃の面影を伝えている、ということになりそうだが、時雨亭文庫蔵本のみ自筆書き入れを詳細に検討していくと、建保期の歌合の判に引用されたものなど加筆³の機会や動機が想像できるものがあり、時雨亭文庫蔵本のみ自筆書き入れ全てを貞永元以降と決め付けてしまふことに疑問がある。紙幅の都合上、詳細には触れられないが、稿者自身は志香須賀文庫蔵本は、より建保期に近い時期の面影を伝えていると考えているので、それを前提に論をすすめていきたい。

さて本書について久保田淳⁴氏は、秀歌撰とは異なる備忘録であるとされ、定家の「物」や「事」に対する関心を、六条家歌学の影響或いは漢学者や文人の文学観や詩学の影響などをうけた九条家の歌筵で歌人形成をしていったからではないかと指摘されている。今井明氏⁵は一連の研究により『奥入』や『為家千首』との関係を指摘され、更に建保四年の定家の詠作を検討され本書が本歌取のための実用的な備忘メモであったと指摘されている。それらの先行研究を踏まえ、まず具体的に本歌取歌の典型例として、建保三（一一一五）年の七夕内裏七首を見ていきたい。

二〇一三 「七夕」 あまの河水かけくさ なひく

拾遺愚草 2 2 3 6 天河水かげ草のうちなびき玉のかつらも露こぼるらん

二〇一八 「七夕」 こそのわたりのうつろへは

拾遺愚草 2 2 3 7 天河ふるき渡もうつろひて月のかつらぞ色にいでゆく

二〇四八 「七夕」 天川かはとにたちて

二〇六三 「七夕」 たなはたの雲の衣

拾遺愚草 2 2 3 8 天河かはとの波の秋風に雲の衣をたつやとぞまつ

二〇六五 「七夕」 手たまもゆらにおるはた

拾遺愚草 2239 天河でだまもゆらにおるはたのながき契はいつかたえせん

古今集 一七五 「同（七夕）」 もみちをはしにわたせはやたなはたつめの

拾遺愚草 2240 天河もみちの橋の色に見よ秋まつ袖のくれをまつほど

古今集 七三三 「荒床」 わたつみとあれにしとこを今さらにはらは、そてやあわときえなん

拾遺愚草 2241 天河あれにしとこをけふばかりうちはらふ袖のあはれいくとせ

拾遺愚草 2242 天河あくるいはともなさけしれ秋の七日のとしの一夜を

以上のように七首のうち六首までが『五代簡要』の抄出句に依って詠まれているが、中でも七首のうち四首は万葉集巻十の七夕歌群の抄出句に依って詠まれており、七夕七首を詠む際に本書をひもとき、「七夕」の標記を活用して本歌取りする歌を探したのではないかと思われる。

さて、本書の歌学書としての特徴の一つが、この標記を持つということだが、標記とは何かといえば、抄出句の内容を簡潔に示し、検索の便をはかったものであろうが、同時に、あまたある歌の中から何故その歌が選ばれたのか、定家がその歌句の何に注目して抜き出したのか、を推測する手がかりになる。また『五代簡要』の本文そのものは上條（6）氏の指摘の通り、承元三年の成立以降、長期にわたって定家自筆の増補がなされているが、標記について加筆情況を確認すると、初めから標記のあった歌句に追加されることは、

二八 「山」 彰考館文庫蔵本・志香須賀文庫蔵本↓「名山、衣」 時雨亭文庫蔵本

一〇四七 「旅」 彰考館文庫蔵本↓「旅、サシ竹大宮人」 志香須賀文庫蔵本・時雨亭文庫蔵本

一三〇六 「山」 彰考館文庫蔵本↓「山、紅葉下花」 志香須賀文庫蔵本・時雨亭文庫蔵本

一七三〇 「柞」 彰考館文庫蔵本↓「野、柞」 志香須賀文庫蔵本・時雨亭文庫蔵本

の四例見られるものの、標記のなかった歌句に後に付された例は

二三七〇 「道行人」 時雨亭文庫蔵本のみ

の一例のみで、それも元本からあったと推定される歌句であり、増補部分には一ヶ所も見られないことから、標記は承元三（一二〇九）年の成立時か、それとあまり遠くない頃に付されたのではないかと推測でき、標記について考えることは『五代簡要』執筆時の定家の意識を探る手がかりになると考える。ただ、この標記は古今集卷十六までしか付されていないので、今回は執筆時には一通り標記の付されていた万葉集部分八百首余りを対象に、抄出句の本歌取歌を調査し、標記と実作との関わりを検討し、歌句の抄出の基準について考察し、更に志香須賀文庫蔵本の祖本を書写した為家以外に本書を見た可能性のある人物を確認し、本書の執筆動機を考えていくつもりだが、本稿では紙幅の都合より、その前半について述べ、後半は別稿を予定している。

二、標記と歌題 —— 建保期まで

次に本書の成立時に近く、『五代簡要』所収万葉歌の本歌取歌の多数見られる建保三（一二一五）年九月十三夜成立の「光明峰寺撰政治家百首」を取り上げる。

一五〇〇 「草」 夏草のしけみにまじるひめゆりの

拾遺愚草 1117

夏草

さゆり葉にまじる夏草しげりあひてしられぬ世にぞくちぬとおもひし

二三五三 「山名、隱妻」 はつせのやゆつきかしたにわかゝくしたるつま

拾遺愚草 1125

樹陰納涼

はつせのやゆつきがしたにかくろへて人にしられぬ秋風ぞふく

一〇六〇 「古京」 みかのはらくにの宮こ

拾遺愚草 1131

原鹿

みかのはらくにの都の山こえて昔や遠きさをしかの声

三五二 「舟」 こき行ふねのあとのしらなみ

拾遺愚草 1133

江月

あかす夜は入江の月の影ばかりこぎ出でし舟の跡のうきなみ

三〇七六 「浦」 住吉のしきつのうらのなのりそ

拾遺愚草 1134

浦月

久かたの月の光を白妙にしきつのうらの浪のあきかぜ

八五四 「河名、鳴」 たましまのこのかはかみ まつらかは

拾遺愚草 1135

河月

ひかりさす玉鳴河の月清みをとめの衣袖さへぞてる

二二八五 「野、花」 あきはきのはなの、すゝきはにはいてす

拾遺愚草 1142 野径霜

あさ霜の花の薄おきて行くをちかた人の袖かとぞみる

五九 「寒風」 なからふるつまふくかせのさむきよ

拾遺愚草 1144 寒夜千鳥

浦千鳥かたもさだめず恋ひて鳴くつまふく風によるぞ久しき

六三 「浜名、松」 みつのはま、つまちこひぬらむ

拾遺愚草 1148 浜雪

大伴の御津のはま風吹きはらへ松ともみえじうづむ白雪

三八一四 「玉緒絶」 白玉のをたえしにきとき、しゆへ

拾遺愚草 1159 恋寄名所

しら玉のをだえの橋の名もつらしくだけておつる袖の涙に

七三七 「名山」 わかさちの、ちせの山

七三九 「同」 のちせ山のちもあはむとおもふこそしぬへきものをけふまでもあれ

拾遺愚草 1165 恋寄名所

たのめおきし後瀬の山のひとことや恋をいのりの命なりける

五八八 「名山」 しろとりのとはやま、つ

拾遺愚草 1168

恋寄名所

やすらひにいでけんかたもしら鳥のとば山松のねにのみぞなく

九四六 「浦」 あはちのしまにたゝむきに みぬめのうら

一〇六六 「浦」 ますかゝみゝぬめのうら

拾遺愚草 1172

恋寄名所

わすれ貝それも思ひの種たえて人をみぬめの浦みてぞぬる

八六〇 「河」 まつらかはなゝせのよと

拾遺愚草 1173

恋寄名所

いのちだにあらばあふせを松浦河かへらぬ浪もよどめとぞ思ふ

一二一四 「山、苔」 あたへゆくをすての山のまきのはもひさしくみねはこけをひにけり

拾遺愚草 1174

恋寄名所

槇の葉のふかきをすての山におふる苔の下まで猶やうらみん

三三八七 「駒、橋」 あのおとせすゆかむこまもか かつしかの(9) まゝのつきはし

拾遺愚草 1175

恋寄名所

わすられぬままのつき橋思ひねにかよひしかたは夢にみえつつ

二四八三 「敷妙衣」 しきたへの衣手かれて

二七七六 「冬野」 道のへのくさをふゆのにふみからし

拾遺愚草 1179

恋寄名所

しきたへの衣手かれていくかへぬ草を冬の夕暮のそら

すると、ここでも一五〇〇の標記「草」と拾遺愚草 1117 の題「夏草」、二三五四の標記「山名、隱妻」と拾遺愚草 1125 の題「樹陰納涼」、三〇七六の標記「浦」と拾遺愚草 1134 の題「浦月」、八五四の標記「河名、嶋」と拾遺愚草 1135 の題「河月」、二二八五の標記「野、花」と拾遺愚草 1142 の題「野径霜」、五九の標記「寒風」と拾遺愚草 1144 の題「寒夜千鳥」、二七七六の標記「冬野」と拾遺愚草 1179 の題「旅、冬」というように標記と歌題に共通する文字が見られることに注目したい。「寄名所恋」と「名山」「浦」といった地名の標記もそれに準ずるかと思われる。

中でも「河月」で詠まれた八五四は、『六百番歌合』（一一九三年）で定家が初めて本歌取りした歌で、定家好みであつたともいえるが、

八五四 「河名、嶋」 たましまのこのかはかみ まつらかは

拾遺愚草 882

寄河恋

いつかさは又はあふせをまつらがた此川上にいへはすむとも

ここでは六百番歌合題の「寄河恋」の「河」と標記「河名、嶋」が一致する点に注意したい。同様の例としては

八一 一 「琴」 きみかてなれのこと

拾遺愚草 892

寄琴恋

昔きく君がてなれのことならば夢にしられて音もたてまし

がある。もちろん全体の量からみればごくわずかなので偶然かもしれない。「寄X恋」という六百番歌合題については松野陽一氏⁽¹⁰⁾によって「五題づつ『天象』『地儀』『禽虫』『資具』『人倫』によって分類する」という歌論的な体系をもった構成」であることが指摘され、更に「建久二年に行なわれた『十題百首』の部類と共通した意識を示」していると指摘されている。そこで定家が「十題百首」（一一九一年）の折に摂取した『五代簡要』所収万葉歌を見ると、

二二七〇 「草」 道のへのをはなかもとの思草

拾遺愚草 735 草十

霜むすぶ尾花がもとの思草きえなん後や色にいづべき

二四七五 「草」 わかやとの、きのしたくさ

拾遺愚草 736 草十

あれにけり軒の下草はをしげみ昔しのぶの末のしら露

拾遺愚草 1872

仙洞句題五十首 寄草恋

今はとてわするるたねやしげりにしわがすむ里は軒の下草

四九六 「浦、草」 みくまの、うらのまゆふも、へなる

拾遺愚草 737 草十

我もおもふ浦のはまゆふいくへかはかさねて人をつたのめども

二六八七 「桜麻」 さくらあさのをふのしたくさつゆ

拾遺愚草 738

草十

さくらあさのをふの下露したにのみわけてくちぬるよなよなので

二四一七 「神杉」 いその神ふるのかみすき神なれや

拾遺愚草 742

木十

いその上ふるの神杉ふりぬともときはかきはのかげはかはらじ

一〇九二 「名山」 まきむくのひはらの山

拾遺愚草 743

木十

まきもくやひばらのしげみかきわけて昔の跡をたづねてぞみる

二六九六 「熊、名山」 あらくまのすむといふ山のしはお山

拾遺愚草 767

獸十

思ふにはおくれんものかあらくまのすむてふ山のしばしなりとも

といった例があり、十題百首が詠物題であるためか題と標記が一致するものが見られ、また「桜麻」「神杉」「熊」のようにより具体的な標記も見られる。

再び『六百番歌合』に戻り、今度は定家以外の歌人が『五代簡要』所収万葉歌を撰取した例を見ていきたい。

一五 「雲」 渡津海のとよはたくもにいりひさし

六百番歌合 913

寄雲恋

顕昭

いりひさすとよはた雲のなにならず月なきこひのやみしはれねば

一二四六 「海人、風煙」 しかのあまのやくしほけふり風をいたみ

六百番歌合959 寄煙恋

顕昭

なごのあまのやくしほけふり空にのみわがなをたててやまむとやする

二五三八 「蕙」 あやむしろおになるまてにきみをしましたん

六百番歌合1130 寄席恋

経家

あやむしろたちよる人はなけれどもあらましにのみしきてこそまて

二六二三 「唐藍衣」 からあるのやしほの衣

六百番歌合1127 寄衣恋

季経

からあるのやしほのころもいろふかくなどあながちにつらきころぞ

三三八七 「駒、橋」 あのをとせすゆかむこまもか かつしかの(9) まゝのつきはし

六百番歌合1089 寄獣恋

季経

いかにしてつれなきなかをわたるべきあしおともせぬこまはありとも

やはり、ここでも一五の標記「雲」と六百番歌合913（顕昭）の題「寄雲恋」、一二四六の標記「海人、風煙」と

六百番歌合959（顕昭）の題「寄煙恋」、二五三八の標記「蕙」と六百番歌合1130（経家）の題「寄席恋」、二六

二三の標記「唐藍衣」と六百番歌合1127（季経）の題「寄衣恋」、三三八七の標記「駒、橋」と六百番歌合108

9（季経）の題「寄獣恋」など、「寄X恋」題に通じる標記が見られる。そのほかにも

一七三〇 「野、柞」 山しなのいはたのをの、は、そはら

六百番歌合 4 3 7

柞

有家

秋ぞかしいはたのをのいはずともははそがはらにもみぢやはせぬ

六百番歌合 4 4 0

柞

隆信

やましなのいはたのをのに秋くれて風に色あるははそはらかな

六百番歌合 4 4 4

柞

家隆

秋ふかきいはたのをのははそ原した葉は草の露やそむらむ

三三五四 「同(遠江)」 きへ人のまたらふすまに 衿

六百番歌合 5 8 3

衾

有家

きへひとのまだらふすまはいたまよりしもおくよはのなにこそ有りけれ

三四五四 「衿」 にはにたつあさてこふすま

六百番歌合 5 7 9

衾

季経

かさねずはあけのころももなにならしみをあたためるあさでこぶすま

六百番歌合 5 8 4

衾

家房

さゆるよはあづまをとめいかならむ風もたまらぬあさでこぶすま

四一四八 「雉」 すきのゝにさおとるきゝす

六百番歌合 7 5

雉

季経

みかりする人やきくらんすぎののにさをどるきぎすこゑしきるなり

四一四九 「雉」 あしひきのやたけのき、す⁽¹⁾ あさけのかすみ

六百番歌合 83

雉

顯昭

つまごひのやたけのきぎすころせよかよふすそ野も人あさるなり

二一三二 「夜、霜」 はたれしもふりさむしこよひは

六百番歌合 463

秋霜

有家

むしのねもよわるもしるくあさぢふにけさはさむけくはだれしもふる

二二六五 「蛙、カヒヤ」 あさかすみかひやかしたになくかはつ

三八一八 「カヒヤ」 あさかすみかひやかした

六百番歌合 163

蛙

顯昭

山吹のほふ井でをばよそにしてかひやがしたもかはづなくなり

六百番歌合 960

寄煙恋

寂蓮

山田もるかひやがしたのけぶりこそこがれもやらぬたぐひなりけれ

四四三九 「松雪」 まつかえのつちにつくまでふる雪

六百番歌合 554

寒松

経家

けさ見ればゆきたかさごの松がえはつちにつくまでふりつみにけり

一七三〇の「柞」、三三五四と三四五四の「衾」、四一四八と四一四九の「雉」、二一三二の「夜、霜」と六百番歌合 4

63 (有家) の題「秋霜」、二二六五の「蛙」と六百番歌合 163 (顯昭) の題「蛙」、四四三九の「松雪」と六百番歌

合554（経家）の題「寒松」など、題と標記に共通するものが見られる。中には、二六三三や、四四三九など六百番歌合以前に本歌取り例の見られない歌の撰取が見られ、先にあげた他にも

三四九八「菅」 うなはらのねやはらこすけ あまたあれは⁽¹²⁾

六百番歌合753

絶恋

顕昭

うなはらのねやはらこすげいまさらにたれにひかれてみえぬなるらん

など数首ある。又三三八七のように『初学抄』⁽¹³⁾『和歌色葉』といった他の歌学書が「橋」に注目しているのに対して、六百番歌合の例と『五代簡要』が注目した箇所が「駒」と共通する点のある例も見られる。こうしたことから『五代簡要』の抄出句には六百番歌合の経験が反映してはいないかと想像する。

そこであらためて標記を追ってみると、「草」「木」をはじめ六百番歌合の「寄X恋」題で取り上げられた素材のうち「笛」「絵」「遊女」「傀儡」「樵夫」「商人」以外のすべてを見出だすことができる。そのほか『仙洞句題五十首』にある「寄舟恋」の「舟」、『為忠家後度百首』の「寄X恋」にある「井」「鷹」「鏡」「錦」「糸」、『崇徳院句題百首』⁽¹⁴⁾のみの題の中では「寄苔恋」「寄弓恋」の「苔」「弓」があり、更に「枕」「玉」など後の『光明峰寺撰政治家歌合』の題につながるような標記も見られる。他にも似た例として「袖」「鬢」「矢」「剣」などがあることから、万葉集から歌句を抜き出す際「寄X恋」題の素材を想定していた可能性があるのでないか。

もちろん、「七夕」「紅葉錦」など四季歌に登場しそうな素材や、承元元年の『最勝四天王院障子和歌』に見られるようなこの時代の名所への関心を反映するように、地名も多数取り上げられ、また「詞」と標記して歌言葉を抄出した箇所や、具体的に「命ニ向」「玉ユラ」「イヤトシノハ」「イササムラ竹」など歌語そのものを標記した箇所も多く、標記

の全てが恋の題に関わるなどというつもりは全くない。しかし漠然と博物誌的関心というか歌論歌学的関心で備忘録を作ったというよりは、標記を伴う歌句の抜き書きという形式で本書を書きすすめていた承元三年当時の定家は、もっと具体的に和歌に詠む可能性のある素材を、過去に存在した或いは将来ありうるかもしれない歌題を念頭において執筆していたのではないか。

三、承久期以降

もっとも建保三年の「光明峰寺撰政家百首」以降、『五代簡要』所収万葉歌の本歌取歌は、今井氏⁽¹⁵⁾の指摘の通り、建保期の詠作、中でも「内裏名所百首」「建保四年院百首」などで多数見られるものの、標記と題の関わりを思わせるような例は、例えば「道助法親王家五十首」「大僧正四季百首」など格好の機会と思われるのに、決して多くはない。参考までに承久二(一二二〇)年頃の「道助法親王家五十首」の場合を取り上げると、

一四〇七 「神事」 みぬさとるみわのはふりか

拾遺愚草2020 杜卯花

みぬさとるみわのはふりやうゑおきし夕してしろくかかる卯花

一四七三 「郭公」 たちはなのはなちるさとの郭公

拾遺愚草2024 夜廬橘

橘の花ちるさとの夕づくよ空にしられぬ影やのこらん

一五一二 「紅葉錦」 たてもなくぬきもさためすおとめこおれるもみち

拾遺愚草 2037

夕紅葉

たつた姫雲のはたてにかけておる秋の錦はぬきもさだめず

二四九三 「山、鹿」 高山の峰ゆくしか

拾遺愚草 2034

暁鹿

ながき夜にあかずや月をしたふらん峰ゆく鹿の在明の声

三〇三二 「山名、雲」 いこまやまくもなかくしそ

拾遺愚草 2046

寄雲恋

いこま山いさむるみねにるる雲のうきて思ひはきゆる日もなし

一四〇七の「神事」と拾遺愚草 2020の「社」、二四九三の「山、鹿」と拾遺愚草 2034の「暁鹿」は多少関連をうかがわせるものの、拾遺愚草 2024の「橘の花ちるさと」は前の歌が源氏物語の明石上の歌の本歌取で「をかべのやど」を詠んでおり、『五代簡要』よりはむしろ源氏物語の連想と思われ、また拾遺愚草 2046の「いこまやま」で「雲」を詠むことは「正治初度百首」で後鳥羽院が詠んだあたりから流行しはじめ、『内裏名所百首』でも多くの歌人が取り上げているので、『五代簡要』にメモしてあったから、というよりは当時の常識にのった選択かと思われる。

また『寛喜元年女御入内御屏風和歌』（一二二九年）では、

五七 「名野、萩」 ひくまのに、ほふはきはら

拾遺愚草 2107

七月 野花

もろ人の心いるらしあづさ弓ひくまののべの秋萩の花

四一五四 とりふみたて、しらぬりの小鈴もゆらに

拾遺愚草 2119 十一月 鷹狩

いはせのや鳥ふみたててはしたかのこすずもゆらに雪はふりつつ

四四四三 久方のあめはふりしくなてしこか いやはつ花にこひしきわかせ

拾遺愚草 2102 五月 瞿麦

さきまざるいやはつ花の日をへつつまがきにあまるやまとなでしこ

五七などは標記と題に関わりがあるかもしれないが、四一五四は二次本段階⁽¹⁶⁾の定家の自筆の書き入れで標記はなく、四四四三も最終本のみが存在する貼紙部分の歌で標記はない。おそらく自筆で加筆をする頃には標記を付す必要を感じなくなっていたためかと思われ、標記と題の関連が見られなくなるのは、そうした定家の関心の変化と関わるのではないかと思われる。

四、最終本のみを加筆と歌題

ところで標記が付されなくなつてからかなり後の加筆と思われる最終本のみを加筆歌のうち、これといって『顕注密勘』『僻案抄』『奥入』『新勅撰集』など定家自身の他の著作と関係がなく、歌枕に注目したとも思われぬ歌句を見ていくと、

九〇一 あらたへの布きぬをたにきせかてに

一二五五 いろとり衣すらすと思て

一二六〇 時ならぬまたら衣をきまほしみ

一三三四 つるはみのときあらひ衣

二五〇四 とき、ぬのこひみたれつ、

二六二六 ふる衣うちすて人は

三五七六 なはしろのこなきか花をきぬにすり

三六二五 いもかきせてしなれ衣

一一九九 もかり舟おきこきくらし

一二〇〇 向舟かたまちかてら

一四〇〇 鳴つたふ足はやを舟風まつと

二七四九 駅路に引船わたした、のりに

三五五九 大舟をへゆもともゆもかためてし

三八六八 おきゆくやあから小舟

一三二二 いせのうみのあまのしまつか あはひたま

二九三七 真玉就コエコヒカネテムスヒツルわかしたひもの

二五〇三 ゆふされはゆかのうへさらすつけまくら

一一二七 おちたきつはしり井水のきよければ

二九〇六 人くに、よはひにゆきてたちのをもまたとかされはさよそあけにける

「衣」や「舟」の歌が多いことに気付く。ほかにも「玉」や「枕」の歌などがあり、貞永元（一二三三）年に行なわれた『光明峰寺撰政治家歌合』の歌題を想起させる。「井」「太刀」も或いは題の候補であったかもしれない。

この時の定家の歌を見ると、「菴」では同じ時に家隆・成実・行能・兼康といった歌人が撰取した、二五三八「菴」あやむしろおおになるまでにきみをしまたん
のような「菴」の歌によらず、

拾遺愚草2597 寄筵恋

あづまの露のかりねのかや筵みゆらむきえてしきしのぶとは

五二一「旅、女」あさてかりほし、きしのふあつまおんな

堀河百首1144 不被知人恋 俊頼

あさでほすあづま乙女のかや菴敷きしのびても過す比かな

万葉歌を撰取した俊頼歌に依るといふ工夫が見られるが、

拾遺愚草2593 寄玉恋

緒をたえしかざしの玉とみゆばかり君にくだくる袖のしら露

一六八六「玉」おほきみのかさしのたまのつまこひに

拾遺愚草 2591 寄鏡恋

行く水の花のかがみの影もうしあだなる色のうつりやすきは

古今集四四 「同(花)、花鏡」 花のか、となる水 ちりか、るをやくもるといふらん

拾遺愚草 2596 寄糸恋

夏引のいとしもなれし面影はたえてみじかき後ぞかなしき

古今集七〇三 「糸」 夏ひきのてひきのいとをくりかへし

「玉」「鏡」「糸」はいずれも成立当時からある歌に依っており、しかも標記と題が同じことから、この歌合と『五代簡

要』には関連があるように思われる。

ただ、先程指摘した加筆箇所に関しては、

拾遺愚草 2598 寄舟恋

白妙の袖のうらなみよるはもろこし舟やこぎわかるらん

拾遺愚草 2594 寄枕恋

忘れずよみとせの後のにひ枕さだむばかりの月日なりとも

「舟」は「枕」とともに伊勢物語を撰取しており、「衣」については

拾遺愚草 2590 寄衣恋

秋草の露わけ衣おきもせずねもせぬ袖はほすひまもなし

一九九四 「衣」 夏草のつゆわけ衣

新古今集所収歌で、定家以前から俊恵と式子内親王に本歌取例が見られ、定家自身がかつて「正治初度百首」で撰取した歌を本歌取りしているので、時雨亭文庫蔵本のみに加筆箇所が即この歌合に結びついた、とは断定できないかもしれない。しかしそれは「備忘録」であった、という本書の性格のためで、詠歌の際、選ばれたのが結果として別の歌語であったとしても、それぞれの題に備えて、或いはそもそも題を設定するとき、その素材が歌題として適当であるかを検討する際に備えて、貞永元（一二三二）年かそれに近い時点で『万葉集』から抜き出され、加筆されたのではないかと推測する。

貞永元年は承元三年から二十三年後、『光明峰寺撰政治家歌合』は「寄X恋」十首というかなり特殊な題、ということから、この時点で推測される歌題と抄出歌の関わりをもとに成立時点について想像をめぐらすのは冒険かもしれない。しかし承元三年の六年後に成立した「光明峰寺撰政治家百首」では標記と題に関わりの見られるものがあり、標記には「十題百首」や『六百番歌合』などの経験が反映しているらしいことから、『万葉集』から何を抄出するかを考える際に、過去にあった歌題や将来ありうる歌題が基準の一つではなかったかと思われる。承元三年の藤原定家は、これ以降企画されるであろう百首歌や歌合を想定しながら——「光明峰寺撰政治家百首」は六年後なので直接それにあてて準備したわけではないだろうが——『五代簡要』を執筆したのではないかと推測する。

○
引き続き別稿で、為家以外に本書を見た可能性のある人物を確認し、本書の執筆動機を考えていきたい。

—了—

- (6) 前掲注(1)論文
- (7) 彰考館文庫蔵本の位置付については検討の必要ありと考えているが、今回は上條氏に従い、志香須賀本の前段階の本と仮定。
- (8) 時雨亭文庫蔵本「ろ」に「ろ」小字傍書。
- (9) 「かつしかの」時雨亭文庫蔵本のみ。「ま、のつきはし」彰考館文庫蔵本欠。
- (10) 松野陽一『藤原俊成の研究』(昭和四十八年)
- (11) 時雨亭文庫蔵本「やたけのき、す」に「八峯」「ヤツオ」、「あさけ」の横に「朝明」小字傍書。
- (12) 「あまたあれは」時雨のみ
- (13) 『初学抄』「両所ヲ詠所 橋 あのおとせずゆかむこまもがかつしかのま、のつきはしやまらずかよはむ」・『和歌色葉』「万葉集所名 橋 かつしかのま、のつきはし」
- (14) 松野陽一「平安末期の百首歌について」(『東北大学教養部紀要』二十五号 昭和五十二年)
- (15) 今井明『五代簡要』と定家の詠作——建保期の定家歌・補説——(『香椎潟』四十四号 平成十一年)
- (16) 伝本については再検討の必要ありと考えているが今回は上條氏の整理に従う。

〔付記〕 本稿は、第三八九回慶応義塾大学国文学研究会(平成十二年六月十日)および和歌文学会平成十二年十一月例会の口頭発表の前半をもとにしている。御教示賜りました先生方に心より御礼申し上げます。